

ニュースレター

「アンラーニングプロジェクト08

資本主義を見限る一生・労働・運動の現在と課題」 の「オープニング」での論議から

社会保障・福祉の容赦のない削減や、労働者保護の解体といった、今、私たちが直面する「生の保障の破壊」を個人的な不幸や「自己責任」とする発想から決別して、その根底にあるネオリベリズム／グローバリズムに対する反撃へと転換したい——そのためにも、私たちの生がどのように抑圧・収奪されているかを見抜くための「遠近法」の獲得が切実に求められているはずです。このような思いから、私たちは今年の春、「アンラーニングプロジェクト07」をスタートさせました。とりわけ、その後半の「第Ⅱ期」の学習会では、世界各地で活発に展開されている反ネオリベ・オルタナティブグローバリズム運動の動向や、この国でのフリーターや不安定雇用労働者といった「保障されざる者」たちの運動から、ネオリベリズム／グローバリズムに対抗するための手がかりをつかむことを試みてきました。そこでの論議を踏まえて、私たちは昨年度に引き続き、「アンラーニングプロジェクト08」を企画し、5月11日（日）、「オープニング」を行いました。以下は、その「オープニング」での論議のアウトラインです。

□昨年度の「アンラーニング」の学習会を通じて何をつかんだのか

「アンラーニング08」の「オープニング」では、まず最初に、今年度をどのように進めていくかを参加者同士で考えあうための一つの素材として、当日の進行役から、昨年度の「アンラーニング」での論議を、特に「第Ⅱ期」の学習会での話を中心として整理して捉えなおすことが行われました。

この数年、東京や大阪、福岡といった大都市では、「フリーターメーデー」や「持たざる者たちの国際連帯行動」など、いわゆる「プレカリアート」、すなわちフリーターや不

安定雇用労働者が「生の無条件の肯定」を掲げて、街頭で声を上げるということが行われるようになっていきます。昨年度の「第Ⅱ期」の学習会でも、東京での「家賃タダにしろ！一揆」の映像が紹介されたりしていましたが、昨年度の「アンラーニング」での論議を通じて、そのような「保障されざる者」たちのまだ名前のない運動が、現在、この国の中からそれなりの厚みと広がりをもって生み出されつつあることを、実感することができました。

人間が資本にとって交換に値するだけの有用なものを提供できる限りで生存をかうじて許容され、さもなければ容赦なく「廃棄」されるという、まさに「社会」なき社会の出現——このような現状に対抗して、この国の「保障されざる者」たちの運動では、賃労働か、さもなければ社会保障・福祉による公的支援によって生きるかという二分法それ自体を問いなおす、無条件の「生の保障」要求が行われると共に、人々が生を受け、次世代を育て、病み、老いを迎えることを共同で支える場としての「社会」を、私たちがもう一度どのように作りなおすのかという根本的な問題提起が、そこでなされているように思えます。そこに存在するトータルな運動のあり方や運動間の横断性——例えば、「生の保障の破壊」への反撃を、反戦運動や、未払い賃金の支給を要求する労働運動、更には、自分たちを低賃金・無保障の労働力として利用していながら、「無能者」・「寄生者」として差別視するメインストリームの社会の体質を批判する「文化」・社会運動として展開するような——の中に、私たちが作りだしたい新しい運動スタイルの萌芽が存在しているように感じています。

99年、アメリカ・シアトル市でのWTO閣僚会議を数万人規模の抗議行動で包囲・流会させた「シアトルの乱」に象徴されるような、ネオリベ／グローバリゼーションに対抗しようとする世界各地での反グローバリズム運動については、昨年度の「アンラーニング」の学習会でも何度も触れられていました。規模としてはまだまだ小さなものではあれ、そのような世界規模での反グローバリズム運動に連動・呼応するような、「保障されざる者たち」の反乱・抵抗の兆しとでも呼ぶべきものが、ようやくこの国でも登場しようとしているのではないのでしょうか。

今年08年は、世界中でベトナム反戦運動を中心に若者たちの異議申し立てが激しく展開された〈68年〉から、40年目に当たります。この国での〈68年〉の運動については、一方では、かつて権力と華々しく闘ったことが「武勇伝」や「オヤジの昔語り」として語られるか、また逆に、「連合赤軍事件」に象徴されるように、後の世代が社会的な運動に関わることをためらわせるような日本の左翼運動の持つマイナス面のみが強調されてきたように思います。しかし、それはまちがいなく、70年代以後の障害者運動や女性解放運動などの反差別運動や、反公害運動といった地域闘争を生み出してい

きました。何よりも、〈68年〉の運動が、共産党を頂点にして大労組に組織化された労働者階級を「本隊」として様々な運動がピラミッド状に構成されるという、それまで長らく続いてきた社会運動の「古典的範型」を決定的に時代遅れのものにしたという意味で、この国での社会運動に大きな「分水嶺」を画したことは、決して忘れてはならないでしょう。

〈68年〉の運動のそれまでにはない特色として、社会的な不正義や抑圧への憤りということに止まらないような楽しさ・「快樂」の要素と、社会変革を指向することとの結合ということがあったように思います。それは、いわば、そのままでは窒息してしまうような閉塞感を集団で体を動かして突破することによる、「行動的快樂主義」とでも呼ぶようなものではなかったのではないのでしょうか。現在、この国での「プレカリアート」たちのサウンドデモ等による「ストリート解放運動」については、マスコミでも少しずつ注目されるようになってきていますが、それは一面では、単に、今の若者たちがお金がなくてもそれなりに楽しくやっているという「若者風俗」や、ある種の「ライフスタイル」として回収されてしまうようなところが全くないわけではありません。しかし、そのような「プレカリアート」たちの「ストリート解放運動」が、〈68年〉の運動の中の「行動的快樂主義」と重ね合わされることで、その社会変革的なポテンシャルティーは、より明らかに見えてくるように思います。逆に、現在の「プレカリアート」たちの運動に照らし合わせて捉えることが、〈68年〉の運動のもつ可能性を私たちがもう一度どのように「活用」するのかを考えるための、一つの手がかりになるように思います。

また今年も、〈68年〉から40年目であると同時に、「米騒動」の90年目でもあります。当時の民衆にとって「米」というものがまさに生きる上で不可欠な「生の保障」を象徴するものだったはずですが、ネオリベ／グローバリゼーションがもたらす「生の保障の破壊」を否応なく強られる現在の私たちにとって、90年前の「米騒動」が新たな意味やリアリティーを持って迫ってくるようになってきているように思います。富山を発祥の地とする「米騒動」は、炭坑での大規模なストライキとも連動しながら、全国各地で約100万人もの民衆が加わる大規模な社会闘争として展開されましたが、それはその前年のロシアでの「12月革命」や、その翌年の日本統治下での朝鮮での「三・一独立運動」、中国での「五・四運動」といった世界規模での民衆闘争とも重ね合わせて捉えることができるでしょう。

また、当時は、工場労働者を中心とする「プロレタリアート」が日本の中でしだいに一つの社会的な勢力として登場するようになってきた時期でしたが、それから90年後の今日、「プロレタリアート」ならぬ「プレカリアート」が労働者のある種の典型的なあり方になろうとしているという意味で、「プロレタリアート」と共に成立したこの国での資本主義

が一つの大きな転換を迎えようとしていると言えるでしょう。「大正アナキズム」とも称されるように、当時は、運動的にはアナキスト的な傾向が優勢でしたが、そのような社会運動の「古典的範型」の成立以前の運動が体現していた雑多なあり方に注目することが、社会運動の「古典的範型」の解体後を生きる私たちにとっての一つの大きな「糧」となるのではないのでしょうか。そのような意味でも、あえて自分たちの「遠近法」をかく乱させて、この国での資本主義の成立から現在へという大きな歴史的なサイクルという視点から、現在の状況を当時の運動状況や世界状況を重ね合わせて見ることが求められているように思います。

以上のように、この国で新たに生まれつつある、「保障されざる者」たちの反乱・抵抗の兆しが、全世界的な反グローバリズム運動や、〈68年〉の運動、「米騒動」と相互に照らし合わされることで、それぞれの運動のポテンシャルや可能性がさらに明確に浮かび上がってくるのではないかということが、昨年度の「アンラーニング」での論議を振り返りながら、何度も強調されました。公共サービスの「民営化」や、強引な炭坑つぶしといった「ネオリベ改革」を強行したイギリスのサッチャーが言ったとされる、"**There Is No Alternative.**"（ネオリベ以外に）他の選択肢はない」という、反ネオリベ運動の中で有名な言葉があって、その頭文字を取って、**TINA**と呼ばれているそうです。まさにそのような、「ネオリベ以外に選択肢はない」という現在、この国を覆い尽くしている諦念やシニシズムを打破するような動きが、「社会」なき社会というべき現状の中で「無条件の生の肯定」を求めて声を上げ始めた「保障されざる者」たちの運動として、ようやくこの国の中から生まれてきているのではないかということが、昨年度の「アンラーニング」を振り返ることの締めくくりとして語られました。

□今年度の「アンラーニング」をどのように進めるか

以上のように、昨年度の「アンラーニング」での論議を整理しなおして報告することが行われた後で、「資本主義を見限る」という、今年度の「アンラーニング」のテーマを設定したことの背景にある思いや、今年度の「アンラーニング」の進め方について、当日の進行役から提案がありました。

第二次大戦後、日本も含めたいわゆる西側の先進国では、労働の単調さに耐えることや、体制転換をもたらすような激しい労働運動を断念することの引き替えに、比較的到高水準の賃金と福祉政策によって労働者の生活を保障するという、広い意味での「フォーディズム的妥協」が労使双方の合意により成立し、賃労働を通じて労働者本

人や直接、賃労働に従事していない家族も含めた「生の保障」が行われるということが、社会生活の中での当然の前提とされてきました。しかし、現在、そのような労使の合意・「妥協」は、資本の側によって一方的に破棄されてしまい、低賃金・無保障の不安定雇用が、この国での大多数の労働者の「標準的」な雇用形態になってしまっています。

99年の「シアトルの乱」以降、WTOの総会や先進国首脳会議が開催される度に、世界中から数万・数十万人規模の抗議行動が行われていますが、反グローバリズム運動の中では、「もう一つの世界は可能だ」というスローガンとならんで、「世界は商品ではない」というスローガンが共通の合い言葉になっています。そのように、警察・軍隊という暴力組織に支えられながらのグローバル化したネオリベ資本主義の無制限で「自由」な利潤追求活動が、いかに社会にとって破壊的なものであるかが全世界の人々にとって共通の認識になりつつあります。また、この数年、とりわけ、昨年ドイツ・ハイリゲンダムサミットへの抗議行動では、"**Make Capitalism History!**"「資本主義を歴史的遺物に」というスローガンが掲げられるようになってきていますが、第三世界の国々への債務取り消しといった全世界的な貧困問題への具体的な取り組みや、戦争の廃絶を求めることと併せて、そのような問題の根底にあるグローバル化したネオリベ資本主義そのものにいかに**NO!**をつきつけるかが、反ネオリベ・反グローバリズム運動の大きな課題になりつつあります。

富山の私たちも、現在のこの国を生きることで否応なく負わされる「生の困難」を、ネオリベ・グローバル資本主義それ自体を「見限る」ことの契機へと反転させていきたいという思いから、今年度の「アンラーニング」では、「資本主義を見限る」という大きなテーマを設定したということが語られました。また、今年度の「アンラーニング」の具体的な進め方として、「まんが 反資本主義入門 グローバル化と新自由主義への対抗運動のススメ」(エセキエル・アダモフスキ著 明石書店)をテキストとして1章ずつ読み進めることと併せて、参加者それぞれがこの社会の中で生きながら何を見限ろうとしているのかをその見限りの「現場」から報告してもらいたいという提案がなされました。

□会場での論議から

以上のように、昨年度の「アンラーニング」の学習会での論議の振り返るための報告と今年度の進め方についての提案がなされた後、それらをめぐって会場の参加者の間で活発な意見交換や論議が行われました。

今回の参加者の全員が昨年度の「アンラーニング」の「第Ⅱ期」での全ての学習会に来ていたわけではないということもあり、昨年度の「アンラーニング」での論議をめぐる報告が抽象的で分かりにくいという発言がありました。

そのような発言に対して、それは報告をした人の論議の整理の仕方が悪いというよりも、今の時代状況への対抗のあり方がまだ人々の共通の「キーワード」になっていないことや、それが図式的に捉えにくいことから来るのではないかという意見が出されると共に、それをあえて図式化するとこうなるのではないかということで、現在の「生の保障の破壊」に対抗する運動の3つのタイプが提示されました。一つは、東京の高円寺界限を中心とする「素人の乱」で、今年の「第Ⅱ期」の学習会で紹介された「家賃タダにしろ！一揆」や、駅前に駐車した自転車の撤去に反対する「俺の自転車返せ！」デモや、区議会議員選挙の選挙運動を口実として高円寺駅前で路上ライブやダンスパーティーを行うといった、今までの日本の運動にはない意表をついたアクションを路上で展開しています。二つめには、生活保護の申請のための援助やアパートさがし等、「ネットカフェ難民」やホームレスの人たちへの支援を行っている「反貧困ネット」があります。また、三つめには、従来の労働組合から排除されてきたフリーターや不安定雇用労働者の労働組合運動があり、今年春の「フリーターメーデー・全国縦断キャラバン」では、全国の14の都市の街頭で「フリーターメーデー」が行われたということでした。

ただ、気になる点としては、確かに雇用の「劣悪化・不安定化」ということが現在の「生の保障の破壊」の中心にあることはまちがいないが、「生の保障の破壊」ということのもう半分には、社会保障・福祉の削減ということがあり、そこから「生の保障の破壊」を考えるという観点が、昨年度の「アンラーニング」の学習会全体を通して希薄であり、どうしても「労働」を中心にした批判になっていたのではないかという意見が出されていました。

また、今回の「オープニング」では、自分にとっては親や学校を見限るといのは分かるような気がするのだが、「資本主義を見限る」というのはどういうこととして考えればいいのかという発言や、「見限る」というのは、どうしても個人的な判断の言葉のように聞こえてしまうという意見など、「資本主義を見限る」という今年度の「アンラーニング」のテーマに対して、それを実際にどのように自分なりにイメージしたらいいのかよく分からないといった発言が、何人もの参加者から出されました。そのような発言に対して、社宅といった企業の福利厚生も含めて賃労働を通じて生活が保障され、また、失業や老後といった「リスク」に対しては失業保険や年金といった社会保障・福祉によって生活するといった「生の保障」のしくみが、現在、解体してしまっているということの認識の上で、

このようなテーマを設定したということをも、前提にしてほしいという意見が出されました。また、「資本主義を見限る」ということはこういうことだといった何か「正解」があるわけではなく、今、それぞれの人がぶつかっている問題と大きな状況とをどうつなぐかが大事だし、それらをつなぎあわせることで何かが見えてくれば良いのではないかということでした。更にその発言に付け加えて、何を見限りたいかは人によって違うと思うが、自分としては、「生の保障」を破壊している「元凶」を見限りたいし、この場ではいろいろと語り合いながら「豊か」に見限ることをしていきたい、という思いが語られました。

今回の「オープニング」の中で、現在の資本主義のあり方が多くの人々に「生の困難」を強いていることは間違いないが、「資本主義を見限る」ということと、「反資本主義」ということとはどう違うのかということも、今後のテーマとして論じたいという発言がありました。また、自分が学生だった頃には、「資本主義が社会主義に移行していくのは歴史的な必然だが、それにどう参加していくのかが問題だ」といったことが、学生たちの間でまじめに論じられていたが、現在、社会主義という対立項がない中で、そのように「体制を選択する」という感覚が今の人たちにどのように実感としてあるのかが気になるという意見も出されました。昨年度とは異なり、今年度の「アンラーニング」では、話し手を余所から招くのではなく、基本的に参加者からの報告や参加者同士の討論を中心に「資本主義を見限る」というテーマを深めていきたいと考えていますが、そのような論点は、今後の論議を進めていく上で重要なポイントであるように思います。

また、「オープニング」の最後の方で、「米騒動」に触れながら、当時は、国家とも地縁・血縁を中心にした村落といった地域共同体とも異なる、社会という範疇が日本の歴史上初めて登場するようになった時代であり、国家の側も初めて、広く国民全体を対象とする社会政策に着手せざるをえないというインパクトを「米騒動」が与えたことが指摘されました。そのような時代状況の中で、当時の新進の経済学者の福田徳三が、「極窮権」ということを唱えています。それは人が生存権をもつというよりも、生存権を行使する権利をもつということであり、一言で言えば、「困窮極まれば、人は生きるために何をしても許される」という自然法上の概念であるそうです。その言葉に自分としても強く感銘を受けているのだが、そのことを訴えるためだけにでも、ぜひ今年、「米騒動90年」を記念するイベントを行いたいと思っているということでした。そのような直接行動の原理としての「生存権」という発想と、それぞれの人の「生の困難」から発する「もう、たくさんだ」という声や、この世界にあり方にNO！をつきつけたいという思いが重ね合わされることが、「生の保障の破壊」の「元凶」である、現在のネオリベ・グローバル資本主義をどのように「見限る」のかということにアプローチしていくための大事な切り口になるのではないかと思います。

アンラーニングプロジェクト08 次回案内

- ① 「まんが 反資本主義入門」第2章を読む
- ② 報告 「3月『反貧困フェスタ』から5月『G8新潟労働大臣会合』まで」

日時： 8月3日(日) 午後1:30～4:00

会場： サンフォルテ 306号室